



学校法人鶴川学院
農村伝道神学校
発行人：ロバート・マ
ウイットマー

**安全保障関連法廃止！
辺野古新基地建設反対！**

「校地・農場からみた本校の歩みから」

教師 池迫直人

本校の四〇年誌「荒れ野を拓かん」によれば「一九七一年一月理事会にて土地処分、営利農場廃止、人員整理方針決定、再建委員会設立／一九七三年三月保育科廃科、同年九月東南アジア科分離独立」と記されています。日本基督教団の組織改革により農村伝道委員会が廃止されて、北米からの支援がとどえた途端に財政難に陥った本校は、町田市に土地を売り渡し生き延びました。譲渡した土地は教育のために使うとの条件を付したので、野津田高校や町田丘の上学園、陸上競技場（サッカースタジアム）などが建てられました。この広大な敷地で営利農場は営まれていました。この時に、一九四八年

に日野からはじまった本校は「神学だけで行く」という一つの転換を図ったことになりました。以後、本校の「神学」教育は、自ら問われる対象となりました。この時期、当時の学生会（自治会）は、「なぜ神学科だけを残したのですか」という問いを教師会に投げかけたそうです。その応答として一〇年ほど後一九八三年に「本校の使命」が出されました。その趣旨は、農民、農村がおかれた状況は周縁におかれた少数者と共通するところがあり、本校は「農の視点」にもとづいて、少数者が負わされている貧困、差別、人権などを神学教育の課題とするという趣旨だと思われまます。ともかく、これは

現在の「教育の目標」に受け継がれました。

同じ頃一九七〇年、日本ではようやく米の自給率が一〇〇％に達しました。この時期に製造業と農業の賃金格差が逆転します。その結果、一家の主たる働き手が、家族農業を続けるために製造業などを掛け持つ、いわゆる兼業農家が増えてきます。日本の農業にとっても転換期でした。本校も転換期を迎えたと思えますが、それはどのように理解すべきものだったのでしょうか。

木俣敏氏は、一九六八年に本校を「農村的地域社会の延長である」と紀要「福音と社会（二号）」で定義しましたが、この三年後、先述の営利農場廃止により、本校は、「神学」を残すために、「農村的地域社会の延長」を他の言葉で置き換えるべきだったのでしょうか。「農村」とどう関わるのかという事です。その後、記憶によれば、農場の担当には、非常勤で井草正氏、星野正興氏・

水谷信栄氏、渡辺晋氏、中継に阿蘇敏文氏などが負ってこられました。二〇〇五年にわたしは着任しました。懐かしい校内を散策する内に、旧食品加工棟近くにそびえるユリの木——春にはユリのような花が一面に咲き乱れていた、——その幹の根元が、夏には背丈を超えるほどに生い茂る雑草に負けて腐りかけていました。これは一九五七年に本校が鶴川に移転した時に、オース宣教師がカナダから持ち帰って種から育てたものだと学生時代に星野氏からうかがっていました。



これを、農場校地が、理念なく、時々の事情に翻弄されてきた象徴的な結果だとわたしは受け止めました。あれから一五年を経ました、この間、遮二無二、木々の剪定、草刈りなどに勤しんできました。景観

は少しはよくなったかもしれませんが、根本的な問題は残されたままです。

本校が鶴川に移転して六三年を経ます。周辺の農地緑地が住宅地となるにつれ逃れてきた鳥が、夏の野菜をほしいままにしばみまます。それとは裏腹に校地の樹木は人を飲み込むように鬱蒼と茂ります。雑木林は、寿命五〇〜六〇年程度のどんぐりやコナラの類いがあちらこちらで倒れはじめ、下層にあるシイ、タブノキ、サザンカなどの次の世代が代わろうと控えています。高く伸びたコナラ、低木のタブノキなどで視界も遮られ、校地全体が暗くなり、ずっと住まっている学生寮の学生たちには多少の閉塞感を感じさせます。また、これからシイタケなどを栽培するためのコナラなどを残すには、少し遅いかもしれませんが、栗畑の栗は数本を残して更地になり、多少の草刈りなどの外、ほとんど世話することができなかつたけれども逞しく生き残ったブルーベリーやミカンが夏、秋に実をつけます。ユリの木も、自ら落とした種により二世を起こし、こどもたちは育っています。雑木林は、樹木の相の遷移とともに農場・校地は、再び転換期を迎えているようです。



そのような校内を駆け回りながら、この土地といかに向き合うべきなのか思案しています。たとえば、先日、一〇月の教師会では、営利農場時代のからの、朽ちて崩壊寸前の農機具庫を修復すべきか、取り壊すべきかをめぐって話し合いました。その後、担当者により、少し掘り下げて再度話し合いました。これまで農機具庫に限らず、農場関連の事は、もっぱら収益損失の観点からのみ論じられてきました。それは仕方のないことだと思ひ込んでいましたので、収支の観点からのみ資料をつくって話し合いに臨みましたが、理念不在の話し合いでは一九七一年から何も学んでいないことを胸にしまっておりました。ところが、話しが進む内に、図らずも『神学』教

育の観点から、農場校地をいかに位置づけるかを論ずる必要がある」というところに論点が移っていききました。喜ばしいことです。



おわりに、東日本大震災を機につながりが回復したアジア学院が研修生を連れて毎年一月に訪ねてくるようになりました。農場を案内する折に、当初野菜担当、いまは副校長の大柳さんは、研修生を前に毎年おなじ質問をわたしに投げかけてきました。「なぜ、キリスト教と農業なのですか」と。焦りながら、その都度、思いつきで答えてきましたが、実は、わたし自身が自らに問いかけながら、およそ三〇年間を過ごしてきた問いでもあります。そろそろしっかりと言葉にしなければならぬと考えている次第です。

夏期実習報告

齊藤織恵

以前より、刑期の中にある方に寄り添う教誨ということに関心があり、教誨師をされている金子信一牧師が牧される日本キリスト教団湯河原教会での実習をさせていただくことが叶い、とても感謝しています。

その中で、「人」の多くの問題の根にある、幼少期に満たされなかった思いというものが犯罪の起こる場でも大きく影響を与えているということを確認しました。そして日本の再犯率の高さは日本での社会復帰のハードルが高いという理由があることも改めて理解しました。湯河原教会は児童養護施設城山学園とも繋がりを持たれており、子どもを守る「親」としての役割というものの大切さを思いました。

湯河原という土地は、海と山に囲まれた小さな集落のようになっている、農村伝道の一端を経験することができたように感じました。この感覚を得られたことは貴重な体験だったと思います。

そして実は、偶然東京で知り合って仲良くなった友だちの祖父母の方々が湯河原教会の立ち上げに関わった方々だったというサプライズもあつ

て、私にとって特別な場所となりました。早くまたお訪ねしたい思いでいっぱいです。

下園昌彦

平良先生がお願いしてくださった教会での実習が、コロナウィルスの影響で、次々とダメになってしまおうという状況の中で、母教会であるとはいえ、実習をさせて頂けましたことにも、とても感謝しています。

四月から、毎月一度、鶴川教会で、説教を担当させて頂いているのですが、七月二六日に説教を担当させて頂いたため、隔週ごととはいえ、三回連続の説教奉仕となりました。二週に一度で、しかも、たったの三回で、この大変さなのかと、力不足を痛切に感じるとともに、より一層の学びと訓練の必要性を痛感しました。

週報の原稿作成の中に、四〇〇字程度のコラムの執筆が含まれていたのですが、これにも、かなり、梃子摺りました。けれども、説教とは別の形で、教会の皆さんに発信していくということの、難しさと、重要性を実感することができました。貴重な体験を与えてくださいました、鶴川教会の皆さんに、本当に感謝いたしております。

今年、コロナウィルスの世界中での大流行という、未曾有の危機に直面し、何もかもが、例年とは違う状況の中での、夏季教会実習でしたが、そのような状況だからこそ、学ぶことができていることも、たくさんあるのだと思います。「今ここに生きてあること」を神様に感謝し、委ねて、目の前に開かれる道を、一歩ずつ踏みしめながら、歩んでいきたいと思っています。

清野 量

二〇二〇年九月三日から九月二八日まで期間、私は北海道中標津町にありす中標津伝道所にて実習をさせていただきました。中標津町は北海道の東の端、根釧原野の中にある街でありまして、中標津教会は日本キリスト教団の教会としては最も東側にある教会でもあります。快晴の日には北方領土の国後島が見えるこの土地で、主な主要産業は酪農となっております。根釧原野はその気候、風土において稲作には不向きな土地であり、そのような土地で人々が生活していくには、乳牛を育てて、その乳を搾ることで得られる収入だったのです。私は、中標津伝道所の教会

員の方で、個人酪農家の小出清信兄弟・公子姉妹ご夫妻のお家に一か月間居候をさせてもらいながら、朝夕の搾乳のお手伝いをさせていただきました。それらの仕事の中でも特に印象に残ったのは、牛を牛舎まで連れていく牛追いの仕事でしょうか。小出牧場には常時五、六〇頭の牛たちがおりまして、現役で搾乳の対象となる乳牛たちは三五頭前後となります。それらの牛たちは普段は小出牧場の敷地内の放牧場で放牧されていますので、それらの牛を迎えに行かねばなりません。牛は臆病な生き物ですので、一頭がはぐれるということはあまりないのですが、それでも全体で六〇ヘクター（東京ドーム一、二、八個分）の敷地面積を持つ牧場の中で牛を追うことは、かなりしんどい作業になります。

しかし、かつての古代のカナン時代において、アブラハムが遊牧の生活をしていたのに対して、現代の日本の酪農業は定住型の生活である分、まだ楽なのです。放牧場の周りは、柵で囲われていますし、アブラハムや、多くの羊飼いたちが寝ずの番をして、牛や羊たちが逃げ出さないように見張る必要もありません。北海道にはもちろんヒグマがいて、下手をすると牛が襲われ

てしまうこともありませんが、古代カナンにはクマ以外の巨大な獣、ライオンやヒョウ、リュカオンと言ったヒグマよりも恐ろしい巨大動物たちが闊歩していたのですから、アブラハムや他の羊飼いたちはそのような生き物たちから羊を守るために命懸けで戦わなくてはならなかったことを考えますとまだまだ、自分の仕事は彼らに比べると安全であると思えるのです。ですが、人間以外の動物と共に生活するという面においてはアブラハムが体験してきたことを追体験できたのではないかと思います。

小出公子姉妹は中標津伝道所において、中標津でできたチーズの販売を行っておりまして、とてもボリュームのあるチェダーチーズを販売していますので、興味のある方は是非、中標津伝道所に問い合わせてみてはいかがでしょうか。

鳥潟紘一

もうひと月も昔になってしまった。八月一五日（土）から九月二七日（日）まで、水口教会にて実習。大変にお世話になった。六週間（色々あって八週間）、怒涛であったが、正に得難い、思えば思うほど貴重な日々であった。内容として教会実習、幼稚園実習、NPO学童保育実習の三つを横断的に経験、学ばせて頂いた。教会実習では四回の礼拝宣教（奨励）と、谷村牧師の関わる委員会や滋賀地区の集会に参加。幼稚園実習では、週二回の保育実習と環境整備のちよつとしたお手伝い、保護者会への参加や幼稚園主催の講演会参加。NPO学童保育が今実習の中心。ただし、日々の中心という意味で実習全体としての中心は、「子どもたち」である。週四日から五日をスタッフとして参加のため、日々刻々幼稚園から小学生までの子どもたちに遊んで貰い続けた。三五歳独身。結婚の予定も無い暗い男を、子どもたちは一生懸命奮い立たせ、考えさせ、説得した。つまり生命力を。元気を。彼らはいつも深刺と、我がままに、笑い、怒鳴り、汗して、嘘をつき、喜び、欲張り、驚き、工夫し、悔しがり、好いて、嫌って、ほとんど過呼吸だ。対する自分の嘘くささ。平然と構えたふりして、もう随分としよぼくれてしまった。虚飾ない姿の、ある意味での正しさを考えさせられる。率直さは人を傷つけるだろう。だが偽りない実直さは、見ていて安心する。希望にさえ映る。大人は何を獲得しただろう。私の、

裸になれない心は何を守っているか。他者に開いたときに広がる縁があるのだと思う。捨てられない私がいる。子どもたちの懸命さに、学ばされ自分が知れる。一つ決めたこと。好きなときには「好き」と、嬉しいときには「ありがとう」と伝えること。大人と言っても、要するに先に生まれただけのこと。後の者に学ぶことは万とある。後から来る者のために、先にいる者は何がくるか。ただ健やかに育って欲しいと願う。ナオさんリョウさんありがとう。

松本吉氏光

八月下旬から九月下旬までの約一か月間、アジア学院にて農業実習生としてお世話になりました。たくさんのお出会いと豊かな時が与えられたこと、様々な国から来た人たちと共に農作業し、食べものを作り、食事を囲むことが出来たことを、感謝しています。

ここでは、いのちを支えるたべもの作り、有機農業が生活の基本にあり、作業は畑、田んぼ、鶏、豚、山羊の世話、日々の食事作り、食品加工、等々ですが、僕はここで、主に農場の作業に参加しました。畑の堆肥として、土壌菌由来のボカシ堆肥を手間暇かけ作り、これを畑の土づくり

に活用していました。このボカシ堆肥が出来るまでにはいくつかの工程があるのですが、実習中にすべてを体験することが出来なかったため、また訪ねる機会があれば、これらぜひ覚えてみたいの一つです。

朝食後、アジア学院内チャペルにて、平日は作業前にモーニングギャザリング（朝の集い、今年度はコロナ感染予防対策のため外で行っている）があり、その日の担当になった方が、お題は各自の自由な話をして、アジア学院のメンバーと分かち合いの時を持ちます。印象的なのは、アジア学院のチャペルは、講壇が会衆席より低く造られていますので、話をする人が、会衆を見上げるように話することです。これはアジア学院の、サーバントリーダーシップの現れの一つなのかもしれません。パティシパント、この呼び名も印象的でした。ここでは、各国からアジア学院に学びに来た方々を、学生と呼びませんでした。その意味は参加者、参与者、関係者などです。教える、学ぶといった一方的な関係よりも、共に共同体を作り上げてゆくメンバーとして、互いに仕えあう関係性を見ているのだと思います。アジア学院では、ここで過ごす日常

